

# カムパネルラ

～カムパネルラとは～

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.22 2011年5月号

- 忘れないでいたいこと・・・・・・・・・・・・・・・・小野寺 泰子
- くつを履いて・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博
- 「ならぬものはなりませぬ」からの脱却・・・・・・・・齋藤 貴裕
- 一つとして同じものはないことの大切さを教えてくれるこの一冊・・・・大場 淳美
- 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・藤田 博

## ■ 忘れないでいたいこと

小野寺 泰子

ちょっと考えてみれば「なるほど！」と思うけれど、身の回りにものが沢山あることが当然のような生活を続けていると、つい忘れがちな「ものの大切さ」。尽きることがないとただ漠然と思っている様々なものについて、迫力ある強烈なキャラクターで「もったいない」と説くおばあさんの存在が、私たちの心の中にじわじわと迫ってきます。それがこの絵本の魅力となっているのです。



絵本『もったいないばあさん』と出会ったのは、私が小学校5年生の担任をしていた時のことでした。当時勤務していた小学校では、各学年毎月1回、朝の読書タイムに地域の読み聞かせグループの方々に、様々なジャンルの絵本を紹介（1回に2～3冊）していただいていた。何度目かの読み聞かせの日に、その絵本は登場しました。「こんなに のこして もったいない わたしが たべても いいのかい？・・・/コップ 1ぱいで たりるだろ もったいない こと するんじゃ ない！・・・」5年生の子どもたちは、絵本のページがめくられ、登場する男の子がものを簡単に捨てたり、無駄にしたりするたびに、「もったいなーい」と言って行動を起こすおばあさんに大爆笑。しかし、そのうちに、「そういえば、私の家でもみんな水の出しっぱなしはしないようにしている。」「お母さんは、広告やカレンダーの裏もメモ用紙にして使っている。」「だれもない部屋の電気は消している。テレビも見ない時は消している。」といったつぶやきがあちらこちらから聞こえてきました。そして、絵本につられて「もったいなーい」と口々に言いながら、子どもたちは、ものを大切にすることについて考え始めたのです。

折しも、社会科で農業・漁業・畜産・工業などについて調べ、様々な産業にかかわる人々の工夫や苦労について学んだ子どもたちには、ものを作ってくれる人々への感謝の気持ちが芽ばえていました。また、総合的な学習の時間に「森林の学習を通して環境を考える」テーマで活動をしていたことも、自分たちの生活を考える上で影響を与えたようでした。子どもたちは、日頃心がけていることの他に、ものの価値を生かし切るためにできることを次々に見つけてきました。その中に『もったいないばあさんがくるよ！』の絵本がありました。食べ物の他にも身に付ける物の使い方や住まい方など、なるほどと感じるアイディアの数々に、生活がより豊かなものになるといった発見がありました。絵本の後半には、水道も電気もガスもなく、井戸の水やろうそくの火を使っていた江戸時代の暮らしも紹介されていました。

なくなって初めてその大切さに気付くのが、身の回りの数々のものたち。これからも、「もったいない」という気持ちを忘れないでいたい。そして、その気持ちから発する取組を、その場限りのものとしてではなく継続していくことこそ、今必要とされていることだと思ったのです。



「もったいないばあさん」真珠まりこ作・絵／講談社

「もったいないばあさんがくるよ！」真珠まりこ作・絵／講談社

（家庭科教育講座）

## ■ くつを履いて

藤田 博

くつを履いて外に出る、外へと出るためにくつを履く、外なるものと触れるものとしてのくつ、くつが内と外をつなぐものであることの確認ができます。

よちよち歩きの子が散歩に出ます。そうは言いながら、描かれるのはくつだけ、その子が描かれることはありません。林明子作『くつくつあるけ』（福音館書店）は、「くつくつあるけ」そのもの、歩いているのはくつなのです。それでいて、見えないその子を思い描くことができるのはなぜかとの問い掛けに、くつだからとの答えが可能とすれば、足先に履くくつが体全体を表しているために違いありません。



「ぴょーん あっ あぶない ごろん いたたたた ごろんじゃった」、「ごろん」としたのはくつ、「ごろんじゃった」もくつ、それでいて転んだのはまちがいなくその子なのです。「もう ねむい ねむい くつくつ おやすみ ぐー ぐー ぐー」、眠いのはくつでしょうか、その子でしょうか。くつが眠いからその子も、その子が眠いからくつも、見えているのは分身としてのくつなのです。

「この あしあと だあれ」は、しみずみちを作『あしあとだあれ』（ほるぷ出版）で繰り返される問い掛けです。「ちゅんちゅんすずめ」に「にゃんにゃんねこ」、「ぴよんぴよんうさぎ」、それぞれ足の形が違います。違った足の形から違った足跡ができます。すずめだから、ねこだから、うさぎだからこの足跡とわかる、逆にその足跡からすずめにねこ、うさぎを思い描くことができるのです。



ゲルダ・ミュラー作『みえないさんぽ』（評論社）も描かれるのは足跡だけ。ここでは、足跡をたどり、どこをどう歩いたか、どこで誰に、何に会ったか、何をしたか、すべてを探偵の目になって解き明かすことが求められます。右へ向かったか、左へ向かったか、走り出したか、立ち止まったか、具体的な動き一つ一つに抽象的意味合いを持たせることで、足跡（あしあと）は足跡（そくせき）へと変わります。その人の歩み、歩いた道のり、足跡（そくせき）が人生を意味するのはそのためと言えます。

アリスン・アトリー作・こみねゆら絵・松野正子訳『くつなおしの店』（福音館書店）は、くつ屋ニコラス・ドビーの物語です。「小さい店の中でもいちばん小さくて、あまり小さいので、両どりのブリキ屋と生地屋におしつぶされてしまいそう」、ニコラスの店はそれほどに小さいのです。それでも、腕のいいニコラスには、「ジョン・ジェニバーのブーツはすりへってきとるな。早くこないと、なおしがきかなくなるぞ」と、仕事をしながらわかる、歩いているところを見てではなく、聞いてわかるのです。ニコラスは足の悪いポリー・アンのために小さなくつをつくりまします。孫のジャックの頼みを聞いてのもの。わずかなお金で買うことのできた赤いモロッコ革の端切れからです。ポリーのくつをつくった残りの革から更に小さなくつをつくりまします。「こ、これ、妖精のくつだ」、ジャックがそう叫ぶほどの小さなくつです。店の窓にぶら下げていたそのくつはなくなってしまいます。履いていったのは妖精でした。



足がよくなり不要になったポリーのくつから、小さい小さいくつを二十つくりまします。そのくつは全部なくなって、茶いろいぼろぐつと金貨の山が残されていました。ニコラスは妖精が捨てていった羽とネズミの皮から「ちいちゃいさいふ」をつくりまします。「一シリングつかうと、いつもまた、べつの一シリングがはいってい」る不思議な財布です。貧乏なくつ屋が見返りを期待せずにつくったポリーのくつ、そのくつからつくった妖精のくつ、その見返りとして財布を手にしたのです。ニコラスが妖精とつながりを持つのは、内でもあり外でもあるくつをつくるくつ屋だから。くつ屋はくつを通して外なる世界と結びついているのです。妖精が足跡を残すことはありません。ニコラスには、見えないその足跡が見えていたのかもしれないのです。

「くつくつあるけ」／林明子作／福音館書店

「みえないさんぽ」／ゲルダ・ミュラー作／評論社

「くつなおしの店」アリスン・アトリー作／こみねゆら絵／松野正子訳／福音館書店

（英語教育講座）

## ■ 「ならぬものはなりませぬ」からの脱却

齋藤 貴裕

「りんごがひとつ おちていた。みんな おなかを すかせているよ」と始まる『りんごがひとつ』に出会ったのは、10年程前。読み聞かせするのに良い本はと探していたときに見つけたものです。かわいらしいイラストと分かりやすい内容、そして楽しい展開が魅力です。

この絵本に出会って、自分の考え方が変わったところが二つあります。



一つ目は「ならぬものはなりませぬ」から「何か理由があるのかも」へ。

二つ目は「小細工でも、その場をしのごことが大事」から「その場しのぎや小細工では根本は解決しない。後で大変なことになることもある」へです。

一つ目について。サル君がりんごを拾って逃げます。みんなのりんごです。他の動物たちはカンカンになって怒ります。しかし、りんごを取ったサル君には、そうしなければならなかった理由があったのです。サル君には子どもがいたのです。それを知って他の動物たちは納得するのです。

小学校で普通学級を担任していたかつての自分は、「ならぬものはなりませぬ」主義でした。

授業中は席に座っていなければなりません、忘れ物をしてはなりません、給食を残してはなりません、などなど。今考えると「なぜ、『なりませぬ』なのか」の理由もきちんと説明できないままに、怒らなくていいことまで怒っていたような気がします。サル君のような行動をとってしまう児童に対しても、「こらー、みんなのりんごに手をだすなんて、けしからん。」と怒っていたことだろうと思います。

この本に出会って、サル君のような事情を抱えた人に自分のように怒るのはどうだろうと考えを改めました。以来、「カチン」「イラッ」とくることがあると、「きっと、何か理由があるに違いない。何だろう」と考えるように気を付けています。

この本に出会って2年後、初めて特別支援学級を担任することになりました。2年生の男の子2人の学級です。不安だらけです。4月当初、A君は着席どころか、教室に戻ってさえきません。別棟の廊下にあるソファがお気に入りの彼は、授業の時間になってもそこから離れようとしません。A君にはドアの開け閉めを繰り返したり、指しゃぶりをしたりのこだわりがありました。「やめなさい」「教室に入りなさい」と何度注意しても繰り返すA君に、いちいち腹を立てていました。

「A君の行動に腹を立ててもしょうがない」と気付くのはそれからひと月後、5月の運動会の練習が始まる頃でした。練習に参加するためにはクリアしなければならないものがありました。時間内に着替えたり、校庭に移動したりすることです。他の児童が当たり前に行っていることができずに困っているA君に、『りんごがひとつ』のサル君が重なって見えました。今にして、「A君の行動の理由は何だろう」と考えることができたことは、教師として大きな収穫だったと思います。

二つ目について。逃げるサル君が崖から飛び降りる場面があります。サル君は「崖から飛び降りる」という命がけの行動を見せれば、他の動物たちも追うことを諦めてくれると思ったのでしょうか。しかし、実際は崖から飛び降りたふりだけをして、崖のすぐ下のくぼみにちゃっかり収まっていたのです。みんなが「しかたがない…」と帰っていったと思い、再び崖の上に登ると、みんなは「帰ったふり」をしただけ。鉢合せしたサル君は、これまで以上に窮地に立たされることになります。下手な小細工は逆効果であることをその場面から感じます。

ある状況を小細工で乗り切ろうとして、状況がより悪くなってしまった苦い経験が自分にもいくつかあります。今は、「まずいな」「苦しいな」と気付いたら、なるべく早く相談して、正攻法で対応するようにしています。

学校で読み聞かせするのにはもちろん、大人にもお薦めの一冊です。気持ちが「ほっ」とあたたかくなると思います。

「りんごがひとつ」ふくだすぐる作・絵/岩崎書店

( 附属特別支援学校教諭 )

## ■ 一つとして同じものはないことの大切さを教えてくれるこの一冊

ナンシー・ティルマン作／内田恭子訳『あなたが生まれた夜に』（朝日新聞出版）

大場 淳美

「あなた」が生まれた夜、お月さまとお星さまが見守る中、夜の風が、「この世でたったひとつの、あなただけの物語がはじまるわ」とささやきます。ささやかれた「あなたのすてきな名前」は、「そよ風にのって、畑を越えて、海を越えて、木々の間を通り抜けて、みんなの耳に響きわたりました。」それを聞いたホッキョクグマは踊り明かし、渡り鳥はお祝をしようと飛んで家に帰り、お月さまは次の日の朝まで輝きつづけたのです。自分が生まれた夜も、これほどに「すてきな夜」だったのではと思わせてくれます。



失敗したり、間違ったりは誰にもあるはずですが、自分自身の存在意義すらわからなくなることがあるかもしれません。しかし、一人一人が生まれたことそのものが、感動をもたらしていたのだとすれば、存在している意味がない人などいないことになります。自分は世界でひとりしかいません。ここに存在していること自体、奇跡なのです。そこにそうしているだけですてきなことなのです。

私自身も、自分がここに存在する意味について悩んだことが何度もあります。これから先も悩むことはあるでしょう。その度にこの絵本を思い出すのではと思います。「もし、お月さまが次の日の朝まで輝いていたり、テントウムシが飛び去らずにじっとしていたり、小鳥たちが窓辺でくつろいでいたりしたら、それはみんなあなたの笑顔を見たいと願っているから・・・。」という言葉を読み出すことで、笑顔になれると思うからです。

世の中には、生きている幸せを感じることでできる人、生きたいのに生きることができない人、生きることに苦しみを感じている人など様々あります。その人生に一つとして同じものはない、私がこの絵本から学んだのは当たり前のそのことなのです。

（英語コミュニケーションコース4年）

## ■ 新刊紹介

モー・ウィレムズ文・ジョン・J・ミユース絵・さくまゆみこ訳  
『まちのいぬといなかのかえる』（岩波書店）

「それは、はるの ことでした。」「まちのいぬ」が「いなか」にやって来ます。いぬは、「まっしぐらに はしっていきました。」「いわの うえに へんな ものが いるのを みつけ」たいぬは、「なに してるの？」と聞きます。「ともだちを まってるの」いなかのかえるは、「にーっと わらって こたえま」す。「きみを ともだちに しても いいけどね。」いぬは、「いなかの かえるに、いなかの あそびを おしえてもらいました。」

「それは、なつの ことでした。」いぬは「まっしぐらに はしっていきました。」同じ「まっしぐら」でも、「はる」のときとは違ってきます。かえるに会いたい、会って遊びたい思いがあつての走りだからです。「こんどは ぼくの ばんだよ・・・まちの あそびを おしえてあげるね。」

「それは、あきの ことでした。」いぬは「まっしぐらに はしっていきました。」「まっしぐら」のいぬをはぐらかすかのように、かえるは「おもいだしあそび」をしようと言います。「いっしょに いわの うえに すわ」ったいぬとかえるは、「ぴょんぴょん したり、バチャバチャ したり、・・・した はるの ひの ことを おもいだしました。」「クンクンしたり、えだを ポーンとしたり、・・・した なつの ひの ことを おもいだしました。」「いっしょに」「おもいだし」の遊びをする、そこには、空間、時間を共にする意味合いがつくり出されているのがわかります。

「それは、ふゆの ことでした。」いぬは「まっしぐらに はしっていきました。」いぬは「いなかの かえるを さがしました」が、「どこにも いませんでした。」

「それは、また はるの ことでした。」「ともだちを まってるの」いぬがしまりすにそう言います。「まってる」の「まつ」がいぬ、「ともだち」がかえるなのは明らかです。いぬは「にーっと かえるわらいを して」かえるの言ったことばを繰り返すのです、「きみを ともだちに しても いいけどね。」

かえるはどうしたのでしょうか。「あき」にいぬと遊んだとき、「なんだか くたびれたよ。」と言っていたのが気になります。「おもいだしあそびを しよう」と言い出したのが気になります。死んでしまったのではないのでしょうか。それでも、いぬにまた会えたかもしれません。「はる」の訪れとともに冬眠からさめ、いぬにまた会うことができた、そう思いたいのです。



（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館